

博物館だより

第42号

長野市小島田町1414 ☎026(284)9011



引札 (ひきふだ)

松代町 宮本幸治氏 寄贈

引札は配り札のことで、今日のチラシに相当するものです。17世紀後半頃から使われはじめ、明治以降も盛んに配られました。引札の題材は恵比須、大黒などの福神に関するもの、宝船、美人画、故事逸話などが見られ、そこから当時の世相を読み取ることもできます。明治後期になると石板多色刷で店名などの名入れのものが出回り、丁稚^{でっし}などを使って正月用引札として配られました。

表紙の引札は、東福寺村小森の商店の引札です。扱っている商品は米穀・食塩・煙草^{たばこ}・水油・石油肥料とあります。恵比須様が抱えている植木鉢は「金の成る木」でしょうか。「木」に引っかけて次の文句が成っています。いさぎよ木、うんつよ木・しんぼうづよ木、あさお木、よろずほどのよ木、しょうじ木、かせぎよ木、こんつよ木、ついえのな木、家中仲よ木。

冬季オリンピック入館事情

❁オリンピック・パラリンピックイヤー記念

今年度から多くの人に御来館いただくために、文化施設の無料開放の機会を多数設けました。その中で、長野冬季オリンピック・パラリンピックの開催を記念して、1月22日から3月29日まで博物館・プラネタリウム・茶臼山自然史館を無料開放しました（少年科学センター・真田宝物館などは、3月15日まで）。この無料開放の期間には、「極北のイヌイットアート展」（第2期）も開催しました。

❁厳寒期に大勢の来館者

1～2月は、厳寒期のため例年は1年の中でも一番入館者の少ない時期です。過去2年間を見ると、平成9年1月は340人足らずです。平成8年1月は特別展があったため、3,000人近い入館者がありました。今年の1月は昨年の約4倍、2月は例年の約4.5倍の入館者がありました。平均して1月、2月とも例年の約4倍の入館者があったという結果は、オリンピック効果にほかならないでしょう。

❁解説シートを用意

冬季オリンピックに来られる世界中の人々に常設展示をみていただくため、日本語と英語を併記した解説シートを用意しました。当館の展示室は、展示の説明が日本語表記だけで、外国語表記はありませんでした。今回のオリンピック開催を契機に、解説シートと共に展示の中にも英語表記を加えました。

解説シートは、1階と2階をあわせて32種類（A4版）あり、それぞれのコーナーに設置しました。来館者の方全てが持っていけるわけではありませんが、日本の方々にもおおむね好評のようです。オリンピック期間の終盤には、外国の方々の来館も増え、シートを利用していました。

❁オリンピックを通して見たもの

オリンピックが始まると街の中にはあちらこちらに人だかりができ、長野の街は大変に賑わいました。善光寺の御開帳とはまるで違う雰囲気さが街の中に充満しました。オリンピック観戦ではなく、街の雰囲気を味わうために長野に来たと言う人も少なくないようです。スポーツのさわやかさを軸にした人と人とのふれあいや、連帯感を共有したいという思いが長野の街に足を運ばせたのではないのでしょうか。スポーツには人を突き動かす何かがあるのだと思います。昨今の情報機器の進歩は人と人との直接に交わる機会を急速に奪いつつあります。加えて日常の生活には、気軽に出掛け、人と人との触れ合えるような空間はほとんどないといっていると思います。そうした社会状況の裏返しで長野の街の賑やかさとして見うけられたのではないのでしょうか。

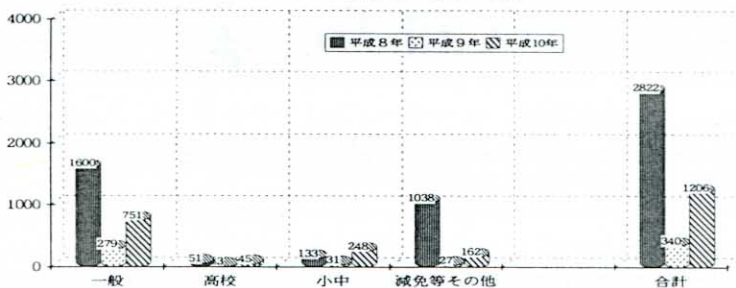
普段の街は、買い物をする、仕事をするといった目的意識を持った人々が行き交うだけで、用事のない人は街に出ません。お祭りの時だけでなく、普段も人が集まるような魅力ある空間があれば人は自然と街に足を向けることが実証できたと思います。そこに行けばおもしろい、何かがあるとといった空間を作り、育てることが街の活性化や地域おこしの土台になってくると思います。また、

この発想は、多様な人々が集まる博物館にも同じことが言えます。「そこに行けばおもしろい。何かがある。」そのような場所の一つが博物館であると位置づけられます。

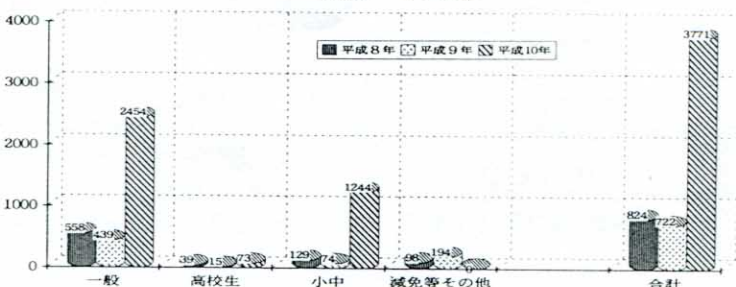
街や博物館で過ぎ行く時間を過ごすのではなく、まわりゆく時間の中で、人とふれあう空間の豊かさの実現できれば、街の活性化や地域文化の創造になると考えます。単に長野で冬季オリンピックがあったと過去形にだけはしたくないと思います。

(文責 山口 明)

1月の入館者数
平成8年・9年・10年



2月の入館者数
平成8・9・10年



寄贈・寄託・購入資料の紹介

平成9年度も多くの資料のご寄贈・ご寄託をいただきました。厚くお礼申し上げます。(敬称略)

寄贈資料

<民俗>加藤昇太郎(西寺尾) 恵比須大黒像1対/伊東陸男(上氷鉋) 念仏講講具他4点/池田政太(東福寺) 松山稔/林美江(御厨) じょうご他5点/広瀬福江(真島) 万石他3点/伊藤義久(小島田) 打掛他6点/石川幸平(七瀬) 瓦焼き道具他3点/萬法寺真如太子講(東寺尾) 聖徳太子御影の刷物/内川逸雄(四賀村五常) 瓦焼き道具/松井久(御幣川) 瓦焼き道具/宮本幸治(松代) 下駄スケート/赤坂政男(青森県八戸市) 草履他4点

<歴史>林美江(御厨) 典籍類10点/伊藤義久(小島田) 典籍類/宮本幸治(松代町) 引札他30点

<考古>花岡光雄(若槻) 弥生土器他採集品123点

<地質>飯島南海夫(青木島) 佐久地方産ナウマンゾウ臼歯化石複製2点

寄託資料

<歴史>檀田区(檀田) 区有文書一括/瀧澤史貴(真島) 愛国婦人会資料3点/加藤昇太郎(西寺尾) 規矩法図解他5点

<地質>飯島南海夫(青木島) 浅科村八幡産ナウマンゾウ臼歯化石

購入資料

<歴史>真田信之書状3点・信濃国細見全図・早見図絵改正道中記・信濃奇勝録・三国伝来善光寺如来絵詞伝・満州移住読本・神風講社/一新講社定宿帳・信濃国村名鑑・引札11点・善光寺境内図2点・戸隠山中社宿方刷物・第5回内国勸業博覧会全図・一府十県連合共進会之図

過去にいくたびも起こった千曲川の洪水の記憶はいろいろな物に関わる伝説として残されています。そういった伝説の中で今回は舟繋ぎ石と呼ばれる石についてみていきたいと思います。

千曲川の河岸にある舟繋ぎ石は、実際に渡し船を繋いだと思われますが、石の中にはなぜこんなところに舟繋ぎ石が、と思うほど川から離れた小高い場所にあるものがあります。

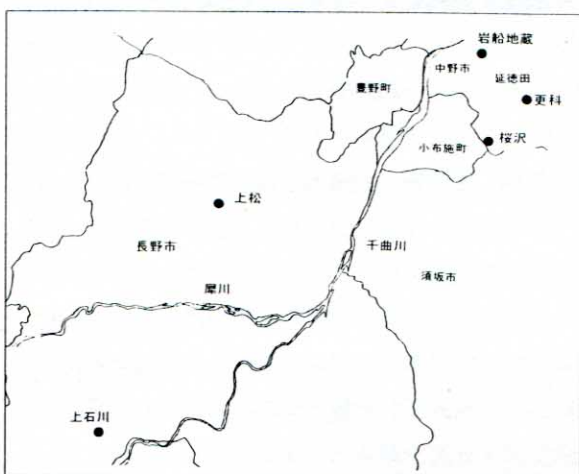
篠ノ井の上石川にある舟繋ぎ石は丸山と呼ばれる小高い丘のふもとにあります。昔は丸山の上にあったそうです。俗に言う石川の七ツ石の一つで、昔長野盆地が湖だった頃森將軍塚（更埴市森）の將軍と、川柳將軍塚（篠ノ井石川）の將軍が船で行き来したとき船を繋いだといわれています。現在石の上には祠が祀られています。これは昔越後のほうから来た石屋が舟繋ぎ石にしようとして割ったがその結果怪我人や病人が出て、結局神聖な石を割った祟りであることがわかり、祠を建てて祀ったものだといえます。

上松の十王堂の裏にある舟繋ぎ石も、昔長野盆地が湖だった頃往来する船を繋いだものといわれ、上松にはその頃渡し守だったという言い伝えのある家があり、今も渡し守の家と呼ばれています。

中野市にも延徳田えんとくたの周囲、更科さらしな（中野市更科）と桜沢（中野市桜沢）に舟繋ぎ石があります（桜沢のものは現在中野市役所に移されています）。延徳田は、やはり昔は遠洞湖と呼ばれる湖で、延徳田をはさんで更科の向かいにある岩船地区には、岩船に乗ってこの湖を渡ってきたという伝承を持つ岩船地蔵もあります。

このような伝説は必ずしも事実を伝えているとは言えません。しかし、伝説は荒唐無稽な作り話ではなく、その地域に住む人々にとって重要なことがらを忘れずに後世にまで伝えるために作られたものです。だから伝説を絶やさないためには上石川のように石を神聖視することで、伝説に関わる事物を残すといったような行為も行われます。

これら舟繋ぎ石の伝説は長野盆地の周囲にあり、かつて湖になったときに船を繋いだとされる点
でいずれも話が共通しています。直接千曲川の洪水については話されていませんが、中野の遠洞湖



は観応年間（1350～1351）に千曲川に注ぐ夜間瀬川の洪水でできたという伝承もあり、話の中に出てくるかつてあったという湖はやはり千曲川とそこに注ぎ込む川の氾濫によるものとして捉えられていたと思われます。

これらの地域の人々は千曲川流域の氾濫の記憶を舟繋ぎ石という伝説に託して現在まで伝えているのではないのでしょうか。

(文責 細井雄次郎)

◀舟繋ぎ石の所在地